



# 名古屋城

## 子ども博士になろう



学習シート「尾張徳川家」編

### 一尾張徳川家はどんな大名だったのでしょー

尾張徳川家(尾張藩)は徳川義直から始まりました



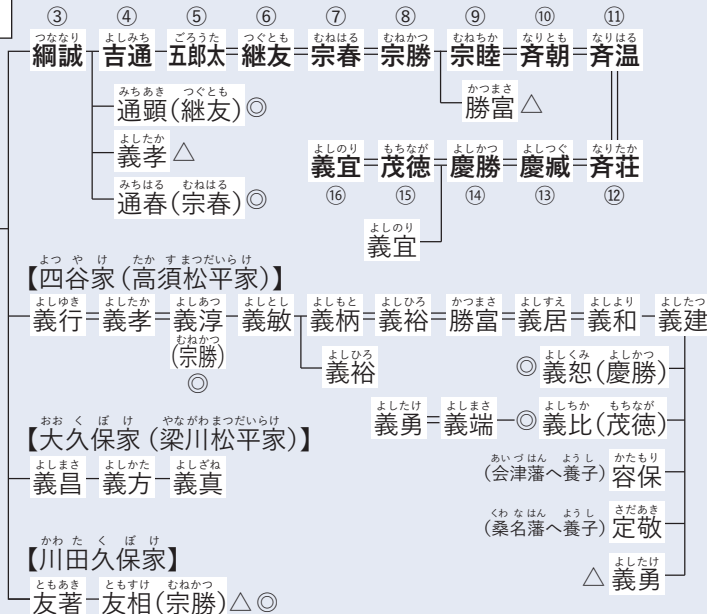
尾張徳川家(尾張藩)は、徳川家康の9男・徳川義直から始まります。初代当主(藩主)義直の血筋は、9代宗

睦まで続きましたが、10代齊朝から13代慶藏までは、将軍家やその血筋から養子を迎えてきました。そして、14代慶勝と15代茂徳は、尾張徳川家分家の高須松平家からの養子です。こうして、江戸時代の尾張徳川家は、16代で約260年続きました。

#### 尾張徳川家系図

徳川

家康 義直 光友



(注) = は養子相続 / 太字は藩主 / ◎は尾張家へ養子 / △は高須松平家へ養子



おわりとくがわけ  
尾張徳川家は  
とくがわごさんけひつとう  
徳川御三家筆頭で  
もつとかくしきたかだいまよう  
最も格式の高い大名でした

とくがわいえやすちよけい いちもん うち おわり  
徳川家康直系の一門の内、尾張・  
きい みと とくがわごさんけ  
紀伊・水戸を徳川御三家といいます。  
おわりとくがわけ ひつとう しよだいまよう  
尾張徳川家はその筆頭にあり、諸大名  
なか もつと かくしき たか だいまよう しよぐん  
の中で最も格式の高い大名で、将軍  
け あとつ ば あい  
家に跡継ぎがいなくなった場合には、  
しよぐん だ だいまよう  
将軍を出すことができる大名でした。  
おわりとくがわけ だいまよみち だいつく  
尾張徳川家には、4代吉通・6代継  
とも しよぐん だ  
友のとき、将軍を出せるチャンスがあり  
けつ か ひとり しよぐん だ  
ましたが、結果は一人の将軍も出すこ  
とができませんでした。



だいまつとも  
2代光友は  
おわりとくがわけ そんぞく かんが  
尾張徳川家の存続を考え  
みつ ぶん け た  
三つの分家を立てました

おわりとくがわけ だいまつとも むすこ  
尾張徳川家には、2代光友が息子に  
た ぶん け  
立てさせた分家があります。  
よしゆき しよだい たかすまつら  
それは、義行を初代とする高須松平  
けよつやけ よしまさ しよだい やながまつ  
家(四谷家)、義昌を初代とする梁川松  
たけ おおくぼけ ともあき しよだい かわ  
平家(大久保家)、友著を初代とする川  
たくぼけ さんけ  
田久保家の三家でした。  
ぶん け ほん け おわりとくがわけ あと  
この分家は、本家の尾張徳川家に跡  
つ た ば あい そな じっさい  
継ぎが絶える場合に備えたもので、実際  
たかすまつらけ だいなわかつ う  
に、高須松平家からの8代宗勝(生まれ  
かわたごぼけ だいまよかつ だいまなが  
は川田久保家)、14代慶勝、15代茂徳

おわりとくがわけ つ  
が尾張徳川家を継いでいます。



おわりとくがわけ かもん  
尾張徳川家の家紋は  
ずあんか  
フタバアオイを图案化した  
あいまん  
「葵紋」でした

みぎ ず おわり  
右の図は、尾張  
とくがわけ かもん あおい  
徳川家の家紋、「葵  
もん いちれい  
紋」の一例です。  
あおい  
葵は、フタバアオ



イというハート形の

は にまい しよくぶつ なまえ  
葉が二枚ついている植物の名前です。  
あいまん さんまい はさき  
「葵紋」は、フタバアオイの三枚の葉先  
えん ちゆうおう つ あ かたち なら  
を円の中央に突き合わせる形に並べた  
もんしよう おわりとくがわけ しよだいまよ  
紋章です。尾張徳川家では、初代義直  
いらい あおい もんよう いぶく はた はこるい  
以来、葵の紋様を衣服や旗、箱類など  
いろいろなもの(しよ)う)に使用してきました。す  
べて同じ形ではなく、時代によって少しずつ  
へんか とき ば あい さまざま  
つ変化し、また、時と場合によって様々  
あいまん えが  
なデザインの葵紋が描かれてきました。



おわりとくがわけ  
尾張徳川家は  
おわりいっこく ほか ちく  
尾張一國と他の5か国にも  
りようち だいだいまよう  
領地をもつ大大名でした

おわりとくがわけ りようち じゅんじ かぞう  
尾張徳川家の領地は、順次加増さ  
れ、おわりいっこく み の 三河 おうみ せつ  
尾張一國と美濃・三河・近江・摂  
つ しなの こく とびち  
津・信濃の5か国にも飛地があり、さら  
き そやまりようち こうだい りようち  
に木曾山も領地でした。広大な領地の

こうしき こくだか まん こく  
公式の石高は、61万9500石でしたが、  
しんでんかいはつ ぞうしゅう き そ やま さい  
新田開発による増収や木曾山からの材  
もくしゅうにゆう くわ え ど じ だいちゅう き  
木収入などを加えると、江戸時代中期  
い こう じつたか まんごく まんごく  
以降には、実高は90万石から100万石  
ちか  
近くあったといわれています。

また、おわりのくにに す ひとびと じん  
また、尾張国に住んでいた人々の人  
こう え ど じょ き ねん えんぼう  
口は、江戸初期の1674年(延宝2)に  
は37万8031人でしたが、幕末の  
1852年(嘉永5)には、65万7858人で、  
やく ばい じんこう  
約1.7倍の人口になっていました。

はんせい き そ かつ ぶん ぶりょうどう とのさま  
藩政の基礎を固めた文武両道の殿様  
しやうだい とくがわよしな  
初代 徳川義直



とくがわびじゅつかん ぞう  
(徳川美術館 蔵)

©徳川美術館イメージアーカイブ / DNPpartcom)

おわりとくがわけ しやうだいらうしゅ よし  
尾張徳川家の初代当主になった義  
な お さい こう ふ じょうしゅ さい  
直は、4歳で甲府城主になり、8歳で  
おわりのくに きよすじょうしゅ ちち  
尾張国の清須城主になりました。父の  
いやす かんどう かんもん のう び へい や  
家康は、関東への関門になる濃尾平野  
まも かつ かい きよてん きよ  
の守りを固めるために、支配の拠点を清  
す な ご や うつ な ご や  
須から名古屋に移すことにし、名古屋

じょうきず よしな お しやうだい じょうしゅ  
城を築き、義直を初代の城主にしました。

よしな お ねん けいちょう おおさか  
義直は、1614年(慶長19)の大坂  
ふゆ じん とよとみがた たたか ういじん かつ  
冬の陣(豊臣方との戦い)で初陣を飾り、  
よくねん なつ じん しもつじん よしな  
翌年の夏の陣にも出陣しました。義直  
が正式に名古屋に入国したのは、父家  
やす な ねん げん な  
康が亡くなった1616年(元和2)、16  
さい  
歳のときでした。

よしな お みずか はん せいじ おこな き  
義直は、自ら藩の政治を行い、その基  
そ かつ た のうぎょうよう いけ しん  
礎を固めたほか、農業用のため池や新  
でんかいはつ すず こめ ぞうしゅう つと  
田開発を進めて米の増収に努めました。  
がくもん ぶどう ほげ とく じゅがく  
また、学問や武道にも励み、特に儒学を  
しょうれい るいじゆにほん ぎ れきし  
奨励するとともに、『類聚日本紀』(歴史  
しょ じん ぎ ほうてん じんじや かん しよもつ  
書)や『神祇宝典』(神社に関する書物)  
あらかず かずかず じつせき  
を著わすなど、数々の実績をあげました。

だいらうぐんむねはる たいこう とのさま  
8代將軍吉宗に対抗した殿様  
だい とくがわむねはる  
7代 徳川宗春

むねはる やながわはん まんごく どうしゅ  
宗春は、梁川藩3万石の当主でした  
おわりとくがわけ だいつくとも きゅうし  
が、尾張徳川家6代継友の急死により、  
だい つ  
7代を継ぐことになりました。当主を継ぐと、  
おん ち せいよう あら せいじ ほうしん  
『温知政要』を著わして政治の方針を  
かしん しめ せつきよてき けいざい はんえいさく  
家臣に示し、積極的に経済の繁栄策を  
じっし しばい まつ しょうれい  
実施したり、芝居や祭りなどを奨励した  
りしました。そのため、城下の商業や芸  
ごと さか こんにち げい  
事などが盛んになりました。今日、「芸ど  
な ご や き そ きず とのさま  
ころ名古屋」の基礎を築いた殿様とい  
りゅう むねはる せいさく  
われる理由です。しかし、宗春の政策は、  
どう じ だいらうぐんとかがわよしむね すず しつ  
当時の8代將軍徳川吉宗が進める質  
そけんやく ざいせいひ し せいさくきょう  
素儉約や財政引き締めなどの政策(享

ほう かいかく ま こう たいりつ  
保の改革)とは真っ向から対立するもの  
でした。一方、宗春のこうした政策は、  
やがて尾張藩政に行き詰まりを生じ、  
城下の風紀が乱れたり、宗春自身の行  
動が問題になったりしました。こうしたこ  
とから、宗春は、1739年(元文4)正  
月、幕府から塾居謹慎を命じられました。



むねはる  
宗春をモデルにした芝居絵  
『享保尾事』所収 / 徳川林政史研究所 蔵

げきどう じだい い とのさま  
激動の時代を生きた殿様  
だい とくがわよしかつ  
14代 徳川慶勝

だいよしかつ しょうぐん け おく こ  
14代慶勝は、將軍家などから送り込  
まれた養子の当主が続いた後、尾張徳  
川家の分家、高須松平家から本家の養  
子に入って当主になりました。慶勝が当  
主になった時代は、幕末の激動期でし  
たが、尾張藩の政治改革や財政立て直し

ちから つ ばくふ せいじ ふか  
に力を尽くしたほか、幕府の政治にも深く  
かかわっていきました。

べりー らいこう かいこく ご にちべいつうしょう  
ペリー来航による開国後の日米通商  
条約の調印問題や将軍継承問題など  
で、時の大老・井伊直弼と対立したおり  
には、無断で江戸城へ登城したことから、  
塾居謹慎を命じられました。

よしかつ よしちか おわりけ もちなが  
慶勝には、義比(尾張家では茂徳。  
のち ひとつばしとくがわ けとうしゅ もちはる かたもり  
後に一橋徳川家当主・茂栄に)・容保  
(後に会津松平家当主・京都守護職  
に)・定敬(後に桑名松平家当主・京都  
所司代に)の3人の弟たちがいました。

よしかつ ねん けいおう と ば ふし  
慶勝は、1868年(慶応4)に鳥羽伏  
見の戦いが始まると、さまざまな状況から  
新政府側につききました。そのため、当時  
幕府側に立っていた二人の弟、容保・  
定敬とは対立関係にならざるを得ないと  
いうこともありました。



とくがわよしかつしゅうぞうしゅしん とくがわりんせいし けんきゅうじょ ぞう  
徳川慶勝肖像写真(徳川林政史研究所 蔵)